March-2012
No.38

NEWSLETTER

財団法人 京都国際文化協会

Kyoto International Cultural Association, Inc.

「平家・海軍・国際派」— 再考

京都国際文化協会理事長　児玉　實英

もう 20 年以上も前のことになるが、「平家・海軍・国際派」ということばが、ときどき話題にのぼったことがあった。最初に私がそのことばを耳にしたのは、昔シアトルのワシントン大学に留学していたころの仲間たちの会だった。半導体メーカーの社長や、証券会社社長、ときに外交官、などが集まっていたが、あるとき、留学帰りの者は、どうも「出世」がもひとつじゃないか、という話になった。国際派はもの知りだし、バランス感覚があって、便利使いされるが、もう一歩というところで、沈められてしまう。最後に沈められるという点では、平家も海軍も国際派も同じだ、というのである。

当時は笑い話だった。というのも、皆、意気軒昂な 50 歳代、第一線で猛活躍していたからである。

しかし笑い話が、今は、現実になってしまった。政界、財界、官界など見回すと、トップグループの中に、あまり純国際派が見当たらない。ほとんど内政派が占めている。もちろん例外も多いし、また内政派でありながら国際的視野をもっている人もたくさんいる。しかし、全体としては、韓国やシンガポール、その他外国に比べると、日本では国際派のリーダーがずいぶん少ないように思える。

かつて織田信長は国際派だった。明治を支えた人たちも国際派だった。戦後の日本をつくりなおしたのも国際派だった。日本では、歴史の節目では、国際派が活躍してきたように思われる。

なにも内政派がよくないといっているわけではない。彼らは、彼らの役割を果たしてきた。彼らは、企業にしろ官庁にしろ、組織のしくみや人間関係を知り尽くし、コンプライアンスを重視し、とくに 1990 年以後バブル崩壊のあと始末に力を発揮した。たしかにこの 20 年、内政派の功績は大きかった。しかし同時に、この間、日本の経済が委縮してしまったことも認めざるを得ない。もちろん原因はいろいろあろうが、である。

この議論はさておき、私がここで言いたいのは、大切なことは、これからの日本が国際社会の中で生きていくためには、新しい国際派が表におどり出て、もっと活躍しなければならないのではないか、ということである。政治も経済も文化も、ますますグローバル化していく時代に、組織の中枢部で、国際派がさらに安心してがんばれる環境をつくらなければならないのではないか。

最近ヨーロッパの外国語教育の基本的な考え方は、バイリングァルでなく、「マルティリングァリズム」だといわれている。——つまり 2 ヶ国語以上の外国語をマスターさせ、より広い情報網の中から必要なものを選びだす力をつけ、相手文化を尊重しつつ対話——ディベイトでなく——ができる交渉力を身につけさせる。そして責任感をもって世界をとびまわる国際人を育成しよう、というのである。

日本もこれから、ただ外国語ができるだけでなく、そういった新しい国際派の育成が必要だろう。ただ日本では、それに加えて、かんたんに沈められないような、また内政派とともに仕事ができるような、包容力と体力も必要だろう。

京都国際文化協会では、近年、日本文化を外国人に理解してもらうことに注力してきた。それはもちろん大切なことで、継続していくべき仕事である。しかし同時に、上のような新しい国際派を大切にする気運や環境をつくり出す仕事も重要ではないか、と、そう思う今日このごろである。

ことしの KICA

■やさしい日本語教室　（詳細は p. 4 ）

Ⅰ期	4 月	～ 6 月	毎週金曜日
Ⅱ期	7 月	～ 8 月	毎週火・金曜日
Ⅲ期	10 月	～ 12 月	毎週金曜日
Ⅳ期	1 月	～ 3 月	毎週金曜日

■国際交流講座「基礎から学ぶ日本語教育講座」

Ⅰ期	4 月	14 日(土)	～	6 月	9 日(土)
Ⅱ期	6 月	23 日(土)	～	9 月	15 日(土)
Ⅲ期	9 月	29 日(土)	～	12 月	1 日(土)
Ⅳ期	1 月	12 日(土)	～	3 月	9 日(土)

■色鉛筆画教室		毎月1 回
■日本語ボランティアレッスン		随　時
■国際茶会	10 月	20 日(土)
■エッセーコンテスト		
応募締切	9 月	15 日(土)
コンテスト	11 月	18 日(日)

■当協会の一般財団法人への移行決定

旧来の財団法人は、2013 年 11 月末までに新公益法人として公益財団法人あるいは一般財団法人へ移行するよう求められています。当協会は、かねてより一般財団法人へ移行すべく京都府へ申請していたところ、2012 年 4 月 1 日をもって「一般財団法人京都国際文化協会」として再発足することが認められました。

当協会の事業内容がすぐに変わるわけではありませんが、評議員や理事の陣容を一新して、新たな気持で新たな活動を始めようと一同心に期しています。これまでと変わらず、当協会の活動にご指導とご協力をいただきますようお願いいたします。

■国際交流講座「基礎から学ぶ日本語教育講座」発足

国際交流講座として、今日まで《日本語を教える人のために》という講座を 29 年間にわたって実施してきましたが、2012 年 4 月から「基礎から学ぶ日本語教育講座」と改名して、より実践的な「日本語の教え方」を中心に学ぶことにします。

1 年を 4 期に分け、次ページの講座カレンダーのように、講義だけでなく、ワークショップ形式や実習を取り入れ、考え学びあいながら基礎知識を養い、教え方のこつを学びます。講師は、日本語教育の第一線でご活躍中の国際交流基金関西国際センター日本語教育専門員、中込達哉先生と栗原幸則先生です。

■国際交流講座《日本語を教える人のために》終了

この講座は、1983 年 11 月に《日本語教師養成講座》として開講しましたが、2012 年 4 月をもって、前述のように、「基礎から学ぶ日本語教育講座」に衣替えします。

思い起こせば、1983 年春、事務局員ふたりが玉村文郎先生とご一緒に、当時、国語学・国文学の重鎮であった阪倉篤義京都大学教授のお宅に伺い、講座《日本語を教える人のために》を発足させていただきたいとお願いしました。阪倉先生は「私を含め 11 名ほどの先生方にお願いして、この講座を始めましょう」と応えてくださり、同年 11 月に開講することができました。

以来今日まで、阪倉・玉村両先生を中心に、多くの日本語教育専門の先生方にこの講座を担当していただきました。当初の 15 講の構成から、次第に充実させ年間 43 講にまで増やしてきました。発足当初は 150 人を超える受講生が押しかけ、以後も 30 人から 100 人の水準を保って、修了生は累計約 1,400 人になります。この多くの方たちが、日本語・日本語教育、異文化間コミュニケーションなどの分野で活躍しておられます。

これまで、阪倉・玉村両先生をはじめ、この事業にご協力いただいた先生方や、かつての受講生の方々に深甚の感謝を込めて、本講座の終了をお伝えします。

◈記念すべき第１回の講座内容を4ページに示します。

■ 2012 年 4 月開講　　国際交流講座「基礎から学ぶ日本語教育講座」

	2012	Ⅰ 初級日本語を教えるために	「初級日本語」を外国語として捉える。日本語教師の役割を再認識する 講師：中込 達哉　（独）国際交流基金関西国際センター日本語教育専門員
1	4/14	初級日本語再考	初級日本語を再考し、それを意識して使えるようにする 文型、3 つの動詞グループ、形容詞、テンス、助詞、教室用語等
2	4/28	学習者と教師	「学習者」、「教師」について考え、よりよい授業に繋げる ニーズ、レディネス、学習スタイル、動機、コンピテンス、学習目的、多様性等
3	5/12	文法力再考	初級日本語の文法・文型で何ができるか、その力を再考する シラバス、カリキュラム、コースデザイン、自己目標、自律学習、誤用等
4	5/26	日本語教師力	「日本語教師力」とは何かを考える 教育、支援、～力、評価、コンピテンシー等
5	6/9	教材案を考える①	初級日本語を活用し、「京都」について発表練習をする 発信、プレゼンテーションスキル、談話等
	2012	Ⅱ 初級日本語を教えるために 実習パート 1	模擬授業への準備として『みんなの日本語』の文型ポイントを整理する 講師：栗原 幸則（独）国際交流基金関西国際センター日本語教育専門員
1	6/23	初級文型整理①	『みんなの日本語』 1- 5 課の文型ポイントを整理する
2	7/7	初級文型整理②	『みんなの日本語』 6-10 課の文型ポイントを整理する
3	7/21	初級文型整理③	『みんなの日本語』11-15 課の文型ポイントを整理する
4	9/1	初級文型整理④	『みんなの日本語』16-20 課の文型ポイントを整理する
5	9/15	初級文型整理⑤	『みんなの日本語』21-25 課の文型ポイントを整理する
	2012	Ⅲ 中上級授業の実際	中上級の実際の授業活動から、教材や教え方を学び、新たな授業案を考える 講師：中込 達哉　（独）国際交流基金関西国際センター日本語教育専門員
1	9/29	授業例　「読む」	初級から中級に繋げる読解授業例を学ぶ
2	10/13	授業例　「書く」から「話す」へ	スピーチ作成の授業例を学ぶ
3	10/27	授業例　「話し合う」①	文化を取り込んだ授業例①を体験する
4	11/10	授業例　「話し合う」②	文化を取り込んだ授業例②を体験する
5	12/1	教材案を考える②	「京都」をテーマにした教材を考え、発表する
	2013	Ⅳ 初級日本語を教えるために 実習パート 2	模擬授業を通して疑問点、課題を見出し、助言を参考に実践力アップを図る 講師：栗原 幸則　（独）国際交流基金関西国際センター日本語教育専門員
1	1/12	模擬授業準備	教え方のポイント（導入について）
2	1/26	模擬授業①	（参加者数名の模擬授業、講師による模擬授業、フィードバック）
3	2/9	模擬授業②	（参加者数名の模擬授業、講師による模擬授業、フィードバック）
4	2/23	模擬授業③	（参加者数名の模擬授業、講師による模擬授業、フィードバック）
5	3/9	模擬授業④	（参加者数名の模擬授業、講師による模擬授業、フィードバック）

会場：京都市国際交流会館 3F 研修室　　日時：毎回土曜日 10:00～12:00

費用：協会年会費 5,000 円、受講料：講座Ⅰ 5,000 円、 講座Ⅱ 5,000 円、講座Ⅲ 5,000 円、講座Ⅳ 5,000 円

申込み・問合せ：Tel.075-751-8958、Fax. 075-751-9006、E-mail:kicajim@mk1.macnet.or.jp

1983 年 秋

日本語教師養成講座 Ⅰ 日本語教育の基礎

	講義科目	講師
1	日本語概説	阪倉　篤義
2	日本語の発音・アクセントⅠ	水谷　　修
3	日本語の発音・アクセントⅡ	水谷　　修
4	日本語の文法Ⅰ	川端　善明
5	日本語の文法Ⅱ	宮地　　裕
6	日本語の文法Ⅲ	糸井　通浩
7	日本語の語彙Ⅰ	前田　富祺
8	日本語の語彙Ⅱ	阪倉　篤義
9	日本語の文字・表記Ⅰ	樺島　忠夫
10	日本語の文字・表記Ⅱ	玉村　文郎
11	日本語の位相	壽岳　章子
12	古代語と近代語	宮地　　裕
13	日本語の教材と教授法	堀口　和吉
14	誤用例の研究	堀口　和吉
15	日本語教育総説	玉村　文郎

1984 年 春

日本語教師養成講座 Ⅱ 対照研究と教授法

	講義科目	講師
1	日本語と外国語の対照研究Ⅰ	柴谷　方良
2	日本語と外国語の対照研究Ⅱ	柴谷　方良
3	日本語と英語の発想・表現	児玉　實英
4	日本語とスペイン語	大倉美和子
5	音声教育	水谷　　修
6	語彙教育	田中　章夫
7	文字教育	玉村　文郎
8	文法・文型教育	堀口　和吉
9	視聴覚教育	乙政　　潤
10	東アジアの言語	西田　龍雄
11	東アジアの文字	西田　龍雄
12	日本語と中国語Ⅰ	大河内康憲
13	日本語と中国語Ⅱ	相浦　　杲
14	日本語教育と辞書	玉村　文郎
15	日本語教授法	木村　宗男

受講を終えて　駒井節夫（2011 年度講座受講生）

日本語指導に関わって数年、毎週の教材・指導が惰性になっていた頃、友人のすすめで KICA のこの講座を受けることにしました。

様々な形で外国人への日本語教育に携わってこられた講師陣の講義は、何十年も先生方が研鑽されてきた学術的な内容を日常語で分かりやすく、少しでもたくさん教えようとされていることが、ひしひしと伝わってくるものでした。だから次回にはどんな先生が、どんなことを教えてくださるかと、毎回楽しみでした。

年間の受講を終えて「日本語」「日本語指導」の奥深さを感じ、「日本語」が世界の言語の中でどういう位置にあり、どんな特色があるのかということを学びました。どんな時に何を勉強したらいいのか考える手がかりも得られ、受講して本当によかったと思います。

■日本語を学ぶ人のために

✠「やさしい日本語」教室

1989年京都市国際交流会館の開館と同時に日本語教室が開講され、当協会は主催者の京都市国際交流協会の依頼を受けて、教材開発と講師派遣を担当し、24年目になります。

クラスは 2 レベルあり、年 4 期、各期 3 か月 12 回のコースです。在住外国人の方々の日本での生活、地域の人たちとの交流・相互理解の一助になることを目標にしています。学習者は京都という土地柄を反映して、学生・研究者・芸術家・茶道研修生などが多いのは当初から変わりませんが、最近は一般の会社員や日本人の配偶者や子弟で永住するつもりの人も増えてきました。また日本語学習を滞在目的に組み込んだ観光客や短期滞在者なども少数ながら見られます。

2012 年度スケジュール(各期 12 回、毎週 金曜日)
第 1 期：4 月 6 日～6 月 29 日
第 2 期：7 月 13 日～8 月 21 日（毎週 火・金曜日）
第 3 期：10 月 5 日～12 月 21 日
第 4 期：1 月 11 日～3 月 29 日
入門　午後 1 時半～3 時半、6 時半～8 時半
初級　午後 6 時半～8 時半
場所：京都市国際交流会館会議室
費用：6,000 円
問合せ先：京都市国際交流協会　(Tel:075-752-3511)
または当協会まで (Tel:075-751-8958)

「やさしい日本語」入門クラス風景

Impressions from the Japanese beginner course

Christoph Millotat

The atmosphere in the class is always very friendly and relaxed from the beginning. Shiwa sensei explains everything and is always in good humor. Work with the exercise book helped understanding grammar and construction of the Japanese language while we tried to memorize the Hiragana. After repetition I started to recognize the characters in everyday life. Even though two hours each week seems almost too short. Two times a week that would have speeded up the process, and leave more time to ask questions. I always enjoy going to class and talking to the teacher and my classmates. One day I hope to reach the skill level for the advanced course.

「やさしい日本語」初級クラス風景

「やさしい日本語」クラスを担当して　　小林繁代

「やさしい日本語初級」第 4 期、学習者は 12 人でした。出身国も職業も来日事情も違いますが、日本語を学ぶ意欲十分で熱心でした。3 か月という短期間で、学習するのは初歩的な限られた内容です。毎回基本的な文法を押さえ、日常生活に即した会話練習を大事にしました。題材に日本の生活事情や習慣、文化や年中行事を取り入れたり、学習者自身の生活や各々の国の文化や習慣などについて日本語で表現する場面設定をしたりしました。ペアワークやグループ学習を通じて、学習者が相互に日本語で交流し親しくなっていくのは楽しいものです。文型、文法の復習や短い作文や日記など、「書く」練習は宿題学習中心でしたが、「書く」ことで日本語の力を確かなものにできると実感します。このクラスをステップに学習者の方それぞれが更に日本語学習への意欲を高めていかれることを願っています。

■第 31 回　国際茶会

秋晴れのさわやかな 10 月 15 日（土）、裏千家茶道会館で、(財)今日庵、(財)京都茶道文化協会、（財）京都国際文化協会の共催により、国際茶会が催されました。日本在住の外国の方やその関係の方々に気軽に「茶道」に親しんでいただくことを目的としています。外交官、研究者、留学生など 400 人近くの方々がお茶を楽しんでくださいました。

裏千家茶道会館にて（写真提供　裏千家）

■国際交流プログラム

日本語学習プログラム、歌舞伎鑑賞会、ミニバザー、色鉛筆画教室を行っています。

✠日本語ボランティア・レッスン

講座≪日本語を教える人のために≫修了者の中から日本語ボランティア登録をしていただき、学習者とボランティアの条件を考慮しながらお世話をしています。

レッスン内容・場所・時間は、学習者とボランティア双方の希望や都合で決めていただいていますが、レッスンは主に、当協会事務局、あるいは国際交流会館１階ロビーで行っています。日本語レッスンをご希望の方は、当協会までメール(kicajim@mk1.macnet.or.jp)または、電話（075-751-8958)でご連絡ください。

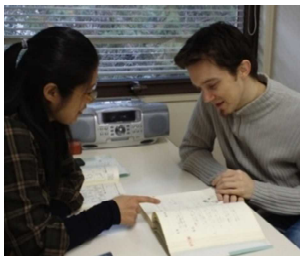
Shaun Johnson

When first moving to Kyoto I enrolled in a beginners' Japanese course here at the KCIF. The course was very helpful, giving me a great foundation in Japanese to build from. It also gave me more confidence when speaking Japanese and showed that you will make

mistakes but that is an important part of learning a new language.

Since then I have changed to taking private lessons which are absolutely fantastic. The lessons are always fun but most importantly, the topics taught are useful for daily life in Japan.

I feel that my Japanese level has improved significantly since taking these lessons at the KICA and would recommend anyone wanting a solid start in the language or wanting to continue the experience of learning Japanese.



レッスン中のショーンさんと中原さん

日本語ボランティアとして　　中原千波

KICA で日本語教師のボランティアをさせて頂くようになって、いつの間にか 2 年近く経ちました。中国語なら少し経験があるものの、英語を話せない私。英語圏の方とのレッスンをためらっていたのですが、KICA のスタッフに励まされ、思い切って始めてみました。人柄の良い生徒さんに恵まれ、一緒に笑いながら勉強しているうちに、1 時間半のレッスンはあっという間に終わります。

生徒さんは日本に関するあらゆる事に興味を持ち、驚いたり喜んだり、アクティブに楽しまれています。その視点を借りて、私も改めて日本語や日本文化を学んでいるようで、とても新鮮です。本人は思うように表現できないもどかしさで、まだまだと感じているようですが、何気ないメールのやり取りにも上達が見てとれて嬉しく思っています。私の外国語は相変わらずサッパリで恥ずかしいのですが、生徒さんが努力している姿に刺激され、今年こそ今度こそと思う次第です。

KICA でのボランティア活動　　澤木福男

当協会のチューターに携わって 8 ヶ月、日本語チューターとしては 4 年が経過しました。

当協会では N3 の受験を目指す人、初級は勉強したが、なかなか日常会話が喋れない人を担当しました。現在の学習者はアメリカニュージャジー州出身の男性で N2 を目指している人です。語彙を増やす為に、新聞記事で話題になっている事を解説します。歴史が好きとの事なので坂本龍馬、幕末の時代背景、現代の大阪市長の橋下徹氏の『船中八策』などを取り上げました。レッスンの中心は『中級へ行こう』『N3 の問題集』の復習で、目標は N2 合格です。

✠色鉛筆画教室

色鉛筆画教室は、月 1 回、土曜日または、日曜日の午後にしています。先生は、KICA のボランティア・レッスンで日本語を勉強しておられる、ナポリの大学で美術史を専攻されたイタリア出身のティツィアーナ・サンタニエッロさんです。

描き方を説明するティツィアーナさん

ティツィアーナ・サンタニエッロ

私が絵を教えているのは、絵を描いたことのない人や、描きたくても何から始めていいか分からない人に、基礎的な方法を教えることできれいな絵が描けるようになってもらいたいからです。教室に来てくださった方々が、ご自分の絵の描き方と私の描き方を比較したり、明暗の付け方やバランスのとり方を興味深く聞いて、そのたびに驚いているのを見るのは楽しいです。来てくださった方々と交流するとき、はじめは普段使わない言葉で説明しなければならなかったので大変でしたが、進めていくうちに慣れてきました。生徒さんは、とてもすてきな作品を創ることができています。そして、継続的に来てくださっている方々は順調に技術が伸びています。

色鉛筆画教室を受講して　　CH

ヴェニスのカーニバルのマスクやゴンドラなどイタリアの風物や日本の風景・花などの写真を見て、鉛筆で寸法を測りながら画用紙に写します。そして色鉛筆で濃淡をつけながら仕上げていきます。このような描き方は、初めての経験で出来上がった時は感激します。

イタリア　アルベロベッロ (画 CH)

■KICA セミナー

毎回、日本語教育や異文化理解について各分野の専門家をお招きして開催しています。具体的、実践的な内容で、ワークショップ形式のものが多く好評です。

第 1 回 2011 年 9 月 10 日(土)
講　師：古川嘉子 国際交流基金日本語国際センター
テーマ：教え方を改善する

「教え方を改善する」ためには、教師が自分の教え方をふり返って問題や課題を発見すること、問題解決や課題達成のための新しい方法を取り入れて実行すること、そしてその効果を確認することが必要だとして、そのための具体的な活動を紹介。

第 2 回 2011 年 9 月 17 日(土)
講　師：香川孝三 大阪女学院大学
テーマ：ベトナムと日本・京都との交流史

ベトナムの地理・歴史と日本との関係についてご講演。

第 3 回 2011 年 11 月 6 日(日)
講　師：森篤嗣 帝塚山大学
テーマ：『にほんごこれだけ！2』を用いた日本語習得支援

外国人がどのようにして日本語を習得していくか、文法を「教えること」に偏らず、日本語の習得を「支援する」ために必要な見方をお話しくださいました。

第 4 回 2011 年 11 月 26 日(土)
講　師：久保田美子 国際交流基金日本語国際センター
テーマ：中上級を教える

日本語学習の「中級」「上級」の各段階で、育成すべき能力や、複数の技能を組み合わせて現実的な運用に結びつける方法、国内外の様々な教授環境でのリソースの活用法と具体的な教室活動の作り方、授業の流れについてお話しくださいました。

第 5 回 2012 年 1 月 28 日(土)
講　師：押尾和美 国際交流基金日本語国際センター
テーマ：学習を評価する

目的に応じたテストの作り方、テスト結果の分析やフィードバックのしかたなど、評価に関する基本的な理論や方法を実践例とともに解説してくださいました。

第 6 回 2012 年 2 月 19 日(日)
講　師：嶋田和子 イーストウエスト日本語学校
テーマ：『できる日本語』教材説明

「教科書がひととおり終わっても、学習者が話せるようにならない」、「授業中のドリルや練習問題はできるのに、運用力がつかない」という日本語教師が共通にかかえる悩みに対応する、学習者が主体的に考えながら日本語を学ぶようになる教え方を紹介してくださいました。

講演中の嶋田先生

「学習を評価する」を受講して　　柴山　尚久

いろいろな力量・レベルの人、異なったニーズを持った人に使えば有効な教育素材・例文を沢山提供して頂いた気がします。特に、テストを設計する際の注意点として挙げられた事は参考になります。

日本語学習者は日常生活が不自由なく送れる事が第一目標です。実際に遭遇する場面にあった会話を多く設定し、早く日本語になれてもらえるようなレッスンを多くしたいと思っています。

『できる日本語』説明会に参加して　　本井葉子

日本語を教えて 7 年目になるが、今まで初級で使ってきたテキストは、文型中心のものが多かった。もちろん基本的な文型は重要であり、また、これらのテキストも、うまく使えば会話力を上達させることもできるが、初級を終わらせるだけでも大変な時間がかかった。短期の滞在者や、時間が十分に取れない学習者等、それぞれのニーズに合った最適なテキストはないか、と以前から探していた。

今回紹介していただいたテキストは、ひとつの課を学習すれば、それがすぐに日常生活の色々な場面や状況で使える、すなわち “Can do statement” が明確に示され、学習者にも達成感が味わえるように、うまく作られていると思った。授業での効果的な使い方や、学習者がどのように変わったか等、ビデオも見せていただいて良く分かった。何よりも、嶋田先生と高見先生の、このテキストに対する思い入れ、そして少しでも日本語教育を向上させたい、という強い思いが伝わってきて、改めて私も頑張ろうと思った。

第 34 回(2011 年度)KICA エッセーコンテスト

日本に住む、日本語を母語としない人たちからエッセーを募集し優秀作を表彰するKICAエッセーコンテストは34回目を迎えました。今回は、例年の《私の見た日本》から少し視野を広げて《私の見た日本と世界》をテーマとし、広報先も 400 ヶ所弱とかなり広げました。賞金も最優秀賞 10 万円とし、5 月の連休明けに公募を始め 8 月 15 日に締め切ったところ、応募数は例年のほぼ 2 倍の合計 119 編（日本語 68 編、英語 51 編）を数えました。

9 月 4 日に日本語の部 6 名、英語の部 6 名の審査委員が集まって予備審査を行ない、日英各 3 編の入賞作品を選び、10 月 2 日には入賞者の口頭発表会兼最終審査会を開催するという、慌ただしい運びになりました。このぐらいの倍率になると、予備審査は紛糾します。ことばの優劣だけではなく、エッセーとしての完成度や独自性、説得力、物語性を審査の基準とするのですが、ツブ揃いの何編かを落とすという困難な作業を強いられました。

最終審査会は、10 月 2 日の午後いっぱいをかけて京都市国際交流会館で行なわれました。日・英部門ごとに 3 人の入賞者各 15 分間の口頭発表に続いて、審査委員との比較的専門的な質疑応答、さらにフロアとの対話を経て、最優秀賞などの審査に移りました。審査の難しさはここでも同じで、日本語部門では 3 人の発表者に優劣をつけがたく、平等に「優秀賞」を差し上げることになりました。審査結果は以下のとおりです。

会場からの質問に答える日本語の部入賞者

日本語の部

優秀賞： 張　博（中国）「遊び心の大切さ」

優秀賞： ヨカ・サーニャ（セルビア）「形のない日本の文化」

優秀賞： 王　雅琴（中国）「日本での就職活動が私に与えてくれたもの」

英語の部

最優秀賞：Folake Abass (UK)
"Being a Black Woman in Japan: Both Invisible and Marked"

優秀賞： JJ O'Donoghue (lreland)
"Japan: What Lies Beneath?"

優秀賞： Md. Shafiqur Rahman (Bangladesh)
"Fukushima Crisis and Dented Japan in the International Community: My View"

最優秀賞には賞金 10 万円、優秀賞には賞金 5 万円（ただし、日本語の部では平等に優秀賞各 7 万円)に加えて、すべての作者に対して国際交流基金京都支部、(株)スリーエーネットワーク、(株)淡交社から副賞が贈呈されました。

来聴者は日本語の部約 60 名、英語の部約 70 名。表彰式の後、多くの審査員と事務局員も参加して懇親会を催し、発表者らと親密に情報交換をすることができました。

なお、2012 年度は、今年度と同じく《私の見た日本と世界》をテーマとしますが、日本に住む外国人に加えて、日本人の英語エッセーを公募することになりました。はじめての試みなので、まずは、京都府下にお住まいの日本人だけが応募できるという制限を設けます。将来は、テーマも公募対象ももっと広げていきたいと、企画中です。

2011 年度エッセーコンテスト入賞作品

遊び心の大切さ

1990 年生まれ。中国河北省からの留学生。東京での語学研修を経て、 現在京都大学工学部で工業化学を学ぶ。来日約３年。

張　博

「遊びをせんとや生れけむ　戯れせんとや生れけん
遊ぶ子供の声きけば　我が身さえこそ動がるれ」

これは平安時代に編まれた歌謡集である『梁塵秘抄』の中に記された歌です。直訳すれば以下のようになります。

遊ぶために生まれてきたのだろうか。戯れるために生まれてきたのだろうか。遊んでいる子供の声を聴いていると、感動のために私の体さえも動いてしまう。

この歌は日本人の心底に秘められたある特質が感じられます。それは、すなわち大人になっても消えない遊び心です。遊んでいる子供の声を聴いて、自分の体も自然に動いてしまうような場面を想像するだけでも思わずくすりと笑ってしまいます。自分が感じた日本人のイメージとぴったり一致した納得の笑いです。

確かに海外では日本人と言うと､｢遊び｣が苦手で、「勤勉」というイメージなのですが、よく考えると日本には遊びへのこだわりから生まれた茶道や華道といった伝統芸能もありますし、集団的に花火を打ち上げる花火大会という祭りもありますし、国技まで発展した伝統的なスポーツである相撲もあります。また、現代の日本文化として日本のアニメ文化やゲーム文化は世界で輝きを放っていますし、数多くの独創的な面白いテレビ番組も世界範囲で注目を集めています。日本人は決してつまらない民族ではありません。むしろ、遊びの面白さをとことんまで追求する子供心あふれた民族です。

私の母国は中国です。中国では子供心や遊び心は良く評価されるものではありません。小さい頃から「遊びを止せ、勉強しなさい」としつけられてきた人は決して少数派ではありません。そのような言葉は中国人の「遊び＝怠け」という価値観形成に拍車をかけています。大人になれば子供っぽいことをしたらすぐ幼稚や未熟といったレッテルを貼られます。

なぜ中国社会では遊び心は許されないのかというと、中国社会は格差の大きい社会で、そのような社会では生き抜くために、激しい競争に勝たなければならないからです。金銭的なストレスに追われて、生きていくのに精一杯で、心のゆとりなんか当然許すわけにはいきません。毎年 1,000 万人にも及ぶ受験者が繰り広げる大学の受験合戦からもその実態がうかがえます。私は中国の受験戦争を経験して 2008 年に日本にやってきました。日本は子供心が許される国です。私は日本社会の優しさに感動を覚えました。

私が留学生活を始めたのは桜が満開の 4 月の東京でした。東京は元気溢れた大都会でした。新宿や渋谷、原宿、秋葉原など、どこに行っても大道芸人の姿が見えます。中には仕事を持つ人も持たない人もいますが、夢をあきらめたくない、生まれたままの天真爛漫な自分を失いたくないという気持ちには変わりはありません。彼らが披露した笑い話を聞いてげらげら笑ったり、彼らが演奏した楽曲を聞くとその曲に合わせて踊りたくなったり、大道芸人の子供心と私の子供心とが共鳴を引き起こし、まさに「我が身さえこそ動がるれ」です。

私が受かった大学は古い都である京都にあるので、

7 月の中旬に京都の祇園祭を体験することができました。指定区域内の車の通行を禁止し、大勢の人が街に出て遊びます。そのようなことは中国ではまず考えられません。私は人波の中を歩んでいるとき、「京都市民が全員ここに集まったのか」と面白半分にたこ焼きの屋台をやっているおじさんに聞くと、「そう考えてもええ。祭りはとにかく遊ぶのじゃ」と言って私にたこ焼きを勧めました。たこ焼きを手にしたわたしは、「まあ、えっか」とそのおじさんの経営戦略に感心しながら、人波に溶け込んでいきました。遊びの意味を深く考えず、ただ遊びそのものをとことんまで追い求める祇園祭は日本人にとってきっとものすごく居心地のよい空間であるに違いありません。

もちろん、日本人が遊び心を持てるのは生活が豊かになったからだと説明するのは失礼極まりないことです。『梁塵秘抄』に記載されているように、日本人の遊び心は古くから伝承されてきた性質です。「万物に神が宿る」という日本人の伝統的な宗教観、自然観のもとで自然を敬い、自然と共存する考え方は今日に至っても衰えを見せません。古代から現代まで日本人の多くは、緑深い森や山、水量豊かな河川など、自然の恵みのなかで生きてきました。

日本人は自然を敬いながら、愛しています。日本人は幼い頃から自然に親しみ、植物や動物に宿る神々と遊んでいました。大人になっても自然は前と変わりなく同じ翡翠の色を放っています。日本人にとっての自然はまさに母なる存在であり、日本人は自然に守られる安心感につつまれることにより、純真な子供心を一生保つことができたのかもしれません。日本人はそういった性質を生かし、多くの分野で花を咲かせています。

欧米諸国では軍事分野の技術革新が民間に波及することが多いです。それと違って、日本では民生分野での技術革新がリードするのが主流です。それは外国人の大人にとって「どうでもいい」ようなことでも、子供心が宿っている日本人は強くこだわり、執着した結果ではありませんか。時々「職人気質」とも呼ばれるその性質から形成した価値観は今世界にも通用するものとなりつつあります。

現在日本が世界にも誇るアニメ産業やゲーム産業の成功は日本人の遊び心の重みを端的に反映しています。『千と千尋の神隠し』の監督として知られている宮崎駿さんは日本のアニメ界の代表的な人物です。彼は心に響くような純真さに満ちたアニメ作品を数多く創作しています。彼の作品を観るといつも作品の美しさと無垢さに感動し、涙が溢れそうになります。彼は自分のスタジオの隣に「3 匹の熊の家」という保育園を設立し、毎日子どもの無邪気な笑い声を聞きながら、作品を創作しています。

『マリオ』シリーズを作ったテレビゲームの父とされる宮本茂さんもまた遊び心いっぱいな人物でした。幼少時代から好奇心旺盛で家の周りの自然を探検することが大好きでした。今でも体感型ゲーム機や裸眼 3D ゲーム機など斬新かつ奇想天外なアイディアで続々と世界的なヒット商品を出しています。

鉄道模型好きな日本人のこだわりにより、日本の電車は世界で最も正確な鉄道運行を誇っています。また、『鉄腕アトム』を読んで育ってきた世代は今世界に先立つ最先端なロボット技術を発展させています。研究を功利への追求ではなく、知的遊びだと考えている大学の教授たちは世界各地の学会で脚光を浴びています。遊び心を大切にする日本人の精神は世界にも認められています。

今、日本は未曾有の災難に見舞われていますが、被災地で撮られたある写真が私の印象に強く残りました。「PSP とモンスターハンター（携帯型ゲーム機とゲームソフト）がほしいです。じいちゃんとばあちゃんがなくなったのでそれなりにがんばりたいです」と書いてある看板を天真爛漫な笑顔で持っている女の子でした。

遊びたい気持ちは決して怠けなんかではありません。それは自然を愛し、他人を愛し、一緒に仲良く前向きにやっていこうという気持ちです。東日本大震災の瓦礫のなかで彼女は素敵な笑顔を見せてくれました。遊びにより心底から生まれる喜びは日本人を元気づけて心を強くしてくれるでしょう。そんな日本人なら、きっと笑顔をもって日本を以前のような素敵な国に復興できると私は信じています。

記者のインタビューを受ける張さん

形のない日本の文化

1981 年生まれ。セルビアからの留学生。
岡山大学で語学研修を受け、東京外国語大学へ進み、現在博士後期課程で言語学を学ぶ。
来日約５年。

ヨカ・サーニャ

電灯、ネオンサイン、煌きのモザイクへと着陸している。終わりが見えない、真夜中の色彩の巨大な海だ。ここは、何百万人も留めている日本の首都で、私も何年か住んでいる。帰ってくる度に、ため息をつかずにいられない。

日本は、世界中で感心される文化が生まれた国だ。武士道、生け花、茶道、歌舞伎、書道などが深い底に根付き、これらは道徳や美を表現する日本の文化の表われだ。私もこれらに心を惹かれて、日本の心を探るために、留学に来た。

しかし、何年か日本に住んでみると、現代日本は、この立派な文化から離れてしまっているように思い始めたのだ。

最近、若者同士の話が耳に入ると、買い物、食べ物と噂話ぐらいだ。国の将来の力になる若者だから、何か違うテーマでも考えた方が良いのではないか、と思ってしまう。日本ではあらゆる物が売れ、技術も発展し、生活は便利になっている。日本人は食とブランドに敏感で、各国の食べ物を楽しんだり、高級なバッグや服を持ったりすることを大事にしている。週末になると、おしゃれな店やレストランが陽気なお客さんであふれる。それでも、日本人は「私たちはお金がない」と言っている。このような話を聞くと、戦争や飢餓に苦しんでいる人々のことを考え、心が痛くなる。あの立派な文化はどこに行ってしまったのか。現代日本では物と金以外に崇めるものがあるのか、と疑い始めたのだ。日本は単なる消費社会になってしまったのか。

私は、非常に悲しい出来事をきっかけに、答えを見つけることができた。

今年の 3 月 11 日は、東京がそれほど素敵な姿を見せたことのない、晴れた日だった。家に帰り、パソコンをつけると、「また地震か」と、揺れを感じた。そのうち静まると思い、パソコンをし続けたのだが、静まるどころか、更に激しくなっていく。そして、部屋にあるものが散らかっていく。家全体が何度も揺れる。私は、机の下に隠れながら震えていた。これは、日本人でも体験したことのない、未曾有の大地震だった。恐怖で家を出て、渋谷まで歩いた。

その混乱した状況の中、日本人の反応はどうだったのか。電車は完全に動かず、いつ動くか分からない。電話もほとんど繋がらない。しかし、家に帰れなくなった人が多いのに、パニックの気配がいっさいない。不満を言ったりする人もいない。改札口の前で、皆列を作って冷静に待っている。これから何が起こるか分からないし、家族の心配もあるだろう。私の国だったら、きっと大混乱になったに違いないが。そして、混乱を利用し、物を盗んだり、暴力を振ったりする人もいない。

家に帰り、テレビをつけると、地震より怖ろしいニュースが伝わってきた。海の方から巨大な波が上がってきて、いくつかの地域を飲みこみ、何万人もの命を奪ってしまった。波といっても、海全体が大陸に上がり、戻っていく。大きな船をマッチ箱のように流していく。車も、建物も。さっきまで親と手をつないでいた子も流していく。まるで映画の中のようで、神様は一体何を考えたかと、胸が苦しくなる。

更に、原発の事故と放射能の恐れ。水道水に放射物が検出され、水を買うのが困難になった。一人にボトル一本という制限になったが、日本人は、店員がいない店で一人分の水を取り、レジにお金を残していく。誰も一人分以上取ろうとしない。誰も物を盗もうとしない。こんな映像がいくつも外国で流れ、故郷の友達からも、本当なのかという連絡が来る。確かに、外国から見ると、店員がいない店で認めら

れた以上の物が取られなかったり、盗まれなかったりすることは意外に見えるが、日本では当たり前の行為だった。

何日か経っても、状況が落ち着かない。日本人の友人から電話が来た。

「サーニャ、危ないから、早くセルビアに帰った方がいいよ」

「セルビアに帰るって、もう日本に戻れないってこと?」

「それは何とも言えないけど、日本はこれからどうなるか分からないから、早くセルビアに帰りなさい」

私は帰る所があるが、行く所がない友人が私の安全を考えてくれた。

「でも、入学の手続きがあるから、帰ることができない」と言ったら、

「それは、私がしてあげるから、心配することはないよ」と言う。

だが、電車が動かないので、空港まで行けない。大使館に連絡したり、バスの予約をしようとしたりするが、何の情報ももらえない。空港まで行けなかったら、航空券が無駄になる。タクシーで行こうと思っても、何万円もするし、運転手が長距離の運転を受け入れない。心配している親の泣き声に対して何とも答えられない。そこへ、同じ日に飛ぶはずのスロバキアの友人から電話が来た。彼女は怖すぎて、ずっと日本人の友人の家に泊まっていた。その友人が私たち二人を、空港まで車で送ってくれると言う。

東京はまだ余震で揺れているし、放射能の恐れもある。屋内退避を促がす情報もある。更に、大きな地震が東京の方にも来る噂がある。とにかく怖い。それでも、友人は自分の安全を考えるより、私たちを空港まで送ってくれることにした。いくら感謝しても、感謝しきれない。

「いえいえ」、その友人が穏やかな表情で言う。「私は、この大変な震災を見て、何か手伝ってあげたい気持ちになったんだ。でも、私は今、被害を受けた人の為に、何もしてあげることができない。二人を空港まで連れて行くのは、私がこんな状況の中で唯一貢献できることだ。二人の話が楽しかったし、これも一つの縁でしょう」

その二ヵ月後、東京で大事な日本の友人との幸せな再会。友人が被災地の石巻でボランティア活動をしてきた。帰国している間、日本のニュースばかり聞いていて、何もする気がなくなり、一ヵ月落ち込んでいたことについて話してみる。

「分かるよ、サーニャ。私も落ち込んでたの。でも、ボランティアをしてから元気になったよ。被災地の人は元気だから、私も元気になったよ」と友人が言う。

本当に津波で被害を受けた人は元気なのか。だって、衝撃から立ち直るのに時間がかかるし、家や最愛の人を奪われた人が多いだろう。そして、原発の事故は解決されず、放射能の恐れはまだある。

「そう。だけど、皆元気。津波は大変だったみたいだけど、その後、皆復興ができるように頑張ってるよ。そして、ボランティアが来るのを感謝している。皆前向きで、明るいよ。だから、私たちも元気でいなきゃ」

やはり、現代日本は単なる消費社会ではない。

文化というのは、人間が築いて、人間が抱いていくものだ。

文化には、形があって、手で触ることができる側面もあれば、手で触ることができない側面もある。人間の行動や考え方、心や道徳というのは、その手で触ることができない文化の側面だ。人間は、苦しんでいる時こそ、真の心を見せることがある。日本は悲しい震災に接し、精神面の文化の表れとして、素晴らしい姿を見せたのだ。このように、日本には未だに深い底があることが分かった。

大変なことがあっても、冷静に行動すること。

自分さえよければいいのではなく、いつも他人も思いやること。

人の気持ちを理解し、友情を大事にすること。

助け合うこと。

何よりも、負けずに、将来に向かって頑張っていくこと。

日本の文化は、これからも煌きを増すに違いないだろう。

賞状を受け取るサーニャさん

日本での就職活動が私に与えてくれたもの

1985 年生まれ。中国上海から立命館大学大学院修士課程に留学し社会言語学を学んで、2 年余り。中国に展開しようとしている日本企業に就職が決まっている。

王　雅琴

「メールにて　祈り祈られ　数十社　私は神か　それとも仏か」

これは、就職活動をしている学生が書いた川柳です。

「祈る」という言葉は宗教のなかでは神聖な行為のはずです。しかし、この川柳のなかの「祈る」は仏陀やイエスキリストに祈るということではありません。この「祈る」という言葉は、「不合格です」という就職活動の選考結果でよく聞く言葉なのです。

「王様のご健闘をお祈りいたします」と、私も企業から何度も祈り祈られました。

つい一週間前までの地面温度 40 度にも達している真夏に、着慣れていない分厚いスーツを着て、黒い就活用カバンに企業パンフレットから、参考資料、就活本まで隙間なく詰め込んで、汗だくで就職活動を続けている自分の姿が浮かび上がってきます。多くの就活生と同じように、内定が取れず、悪戦苦闘をしながらも、毎日のように自分に問い続けてきました。「これをやって、何の役に立つのか」、「どんな見返りが期待できるのか」、「内定はいつ出るのか」。就職活動をしている学生の一人として、就活に伴う辛さ、悔しさ、無力さを、身をもって体験しました。

中国では、就職活動においてもっとも重視されるのは資格や能力、大学で学んだ専門知識です。中国の企業は、日本のように社員を一から育てる文化があまりないため、最初から即戦力になりそうな人を取ります。新卒ももちろん例外ではありません。ですから、卒業時によりよい就職をするため、大学の 4 年間はまさに最も肝心な期間です。そのため、自分の専門はもちろん、専門ではない外国語や資格の勉強にも必死に取り組まないとなりません。私の場合は、専門の日本語の勉強以外も、土日や夏休みを利用して、会計士資格から、秘書認定資格まで取りました。なぜなら、入社したら、すぐにでも売上や企業実績を伸ばせる人でなければ、企業は私たちを採用しないからです。

このように、中国の就職活動では、選考試験では資格や能力などで判断されるので、結果に納得できることが多いです。落ちたということは、自分の能力が足りなかったり、企業にとってすぐにプラスになるような人材ではなかったり、あるいはもっと能力の高い人が現れたりした場合が多いのです。簡単に言うと、今現時点で持っている知識、資格、能力で判断されるので、選ばれるのも選ばれないのも自分次第だと考え、就職するためにすべきことは何か、何を努力したら良いのか、迷うことはありません。

しかし、日本の就職活動は違いました。最も重視されるのは資格や能力ではないようです。面接の質問も、私が一生懸命調べた企業や業界の仕事、努力して得た資格や能力についてなどではなく、「あなたのこれだけは負けない長所は何ですか」、「今までで一番感動したことは何か」、「友達にあなたはどう思われていると思うか」など、中国の就職試験では出ないような質問ばかりで、これでどうやって人の能力をはかっているのかと、最初は不満に思うことも多かったです。そして、落ちた原因が分からず、内定を得るために何を変えたらよいのか、どんな準備をしたら良いのかが分からなくなりました。

しかし、企業訪問や面接を繰り返しているうちに、日本の企業が求める人物像が少しずつ分かってきました。それは、会社という大きなチームの一員としてうまくやっていける協調性のある人間であるかどうか、今後大きな成長を遂げるため今の自分を否定できる謙虚さに溢れる人間であるかどうか、また、きつい作業や地味な作業を毎日コツコツと続ける忍耐力がある人間であるかどうかを、企業は大いに重視しているようです。今の私を評価するのではなく、これから 5 年、10 年、40 年先の私を、私の成長を

見込んで採用するかどうかを決めているのです。

また、ある人事担当者から以下のような話を聞いて、日本の就職活動へのいろいろな疑問や不満も一瞬で解けました。

人事の方々は「選考に来た学生には気持ちよく帰ってもらうこと」を念頭において採用試験を行っているのだそうです。自社を志望するということは同じ業界を志望することが多いはずです。その学生が、もしかしたら取引先企業の担当者となるかもしれません。得意先のお客様となる可能性さえあります。このように、「未来の得意先であり、お客様になるかもしれない」志望者を疎かにしてはいけないと考えているのだそうです。この話を聞いたときに、私は大学生のときに、日本の企業が「和」を尊ぶ習慣のあることを思い出しました。そして、同じ会社のだけではなく、将来の取引の「和」を考えて行動する日本企業に大きな衝撃を覚えました。そうなのです。日本の会社は「和」を重んじる風土があるのです。就職活動で、資格や能力ではなく、私のこれまでの体験や私の考え方についてばかり質問されるのは、会社の「和」を重んじるために、その会社の「和」の一部となるかどうかを確かめるためではないかと私は思うようになりました。

このように、日本の就職活動は人間性が見られるため、私たちは自分のことを深く深く考えなければなりません。そして、それを繰り返していくうちに、不思議に自分のことが見えてきて、「自分ってこういう人間だ」、「自分にはこのような一面もあった」、「実は自分はこういうことがやりたかった」が分かり、自分にとって大切なもの、自分がこれから一生をかけて追っていく夢が、まだまだぼんやりですが、少しずつ見えてきました。

確かに、日本の就活は厳しいものです。長い時間と労力を要するだけでなく、私たちの汗、涙、不安、葛藤もたくさん伴います。しかし、これから、私たちは厳しい世の中で生きていかなければなりません。私たちにとって、就職活動で味わった辛さこそが、これからの長い人生においての良い試練になるのではないでしょうか。そして、日本の就職活動はまさに、雛鳥の私たちを空の覇者である強い鷹に成長させてくれるよい環境だと私は信じています。

私は幸運にも長くてつらい就職活動で「内々定」という成功を勝ち取ることができました。しかし、私が就職活動で得たものは「内々定」という合格通知だけではありません。独特な「日本の就職活動」を通して、これまで知らなかった自分に出会い、新たな夢や目標を描けるようになりました。将来の大きな希望に向けて、新しい自分として飛び立つ勇気を得ました。今こそが大いに成長するときです。今こそが「本当の自分」を探すときです。今こそが「働く意味」、」「生きる目的」を真剣に考えるときです。

そうです。「内定」はゴールではありません。内定は新しい自分の「黎明」なのです。

発表する王さん

Being a Black Woman in Japan : Both Invisible and Marked

Folake Abass

1963 年生まれ。ナイジェリア系英国人。
愛知大学と京都産業大学で英語を教えて、
９年半ほどになる。

"I am an invisible man […]. I am invisible, understand, simply because people refuse to see me. When they approach me they see only my surroundings, themselves, or figments of their imagination, indeed, everything and anything except me. " - Ralph Ellison

One day in the late 1980's while I was living in England, by chance I turned on the TV and happened to see a Japanese Sumo match airing. What was this strange attractive sport called Sumo that had suddenly entered my living room and enticed me to want to start watching it regularly? It was not only the sport itself that caught my eye, but before the end of each Sumo program, glimpses of Japan were shown which piqued my interest even more about this distant country. Prior to this experience, Japan didn't exist for me in any way, shape or form.

Back then, for me Japan was a country "somewhere near China" and not much else. Of course I had heard of "samurai", "geisha" and other things that were typical or stereotypically "Japan" but other than that, Japan could have been Mars. Then suddenly through the window of Sumo, I began developing a strong desire to visit Japan and experience this amazing, attractive country with its rich culture and tradition. These feelings grew stronger and stronger over time.

In my eagerness to make my way to Japan, I never stopped for a moment to think about what it would be like for me as a Black Nigerian-British woman to live in an Asian country. The fact that I could not speak Japanese did not concern me, although this was one of the many things that my family and friends were the most concerned about. "How will you communicate?" "What will you eat?" My friends and family thought that Japanese people only ate sushi. Having eaten out at a few Japanese restaurants in London, I knew there was more to Japanese cuisine than just sushi. Nevertheless, it never crossed my mind to do any research about the country I was going to live in. All I knew was that I was moving to Japan and that was that. I figured I could find out all I needed to know about Japan upon arrival. That is how drawn I was to Japan. I just wanted to get there as soon as possible, as if a magnet was pulling me there beyond my control.

That was over 12 years ago and my approach to travel has completely changed. If I were to go to Japan now for the first time, I would do a very comprehensive internet search where I would try to learn as much as I could. Then I would purchase a travel guide even before I bought my plane ticket. But back then, my desire to be in Japan and to experience all that the country had to offer left little room for second guessing or doubting myself. Without knowing what to expect and with little more than a job waiting for me, I booked my ticket to Japan.

My arrival in Fukuoka in January, 1998 was both a weird and wonderful experience. It was weird in the sense that I was suddenly in this new country that I knew very little about but I had been dying to visit for so long. At the same time, I was suddenly confronted with the "foreignness" of my surroundings. I found the sounds, smell and the hustle of people as they went about their business to be very confusing. Without warning, the enormity of my decision to move to Japan finally hit me. And it hit me hard. "What am I doing here?" I was no longer in England and that was very clear. But at the same time, I found myself walking around in amazement as I took in my surroundings. My first impression of Japan was that it looked so Westernised. Men and women walking around in

kimonos with traditional hairstyles being transported by rickshaws were nowhere to be found. Even still on that first day, as I walked around Tenjin seemingly in a daze, I could not believe that I was finally in Japan. One thing became very clear for me at that time. The fact that it took almost ten years from the first time I saw Sumo on TV until I actually arrived in Japan was, for me, positive proof that dreams do come true.

Very soon, friends back home started to barrage me with questions about my experiences in Japan and chief among them was, “Are there any Black people there?” Until I came to Japan, I never really had to think about the colour of my skin. Although I was born in England, I grew up in Africa (Nigeria) where I lived for twelve years from the age of 10 to 22. There my skin colour was never an issue as I was “one of them”. The only ridicule I suffered came from classmates who teased me about my English pronunciation calling it, “funny English”. Although I looked like other Africans there, I didn't speak like them as I had a British accent. But very soon, as I began to learn the African language, Yoruba, I came to lose my British accent and was able to better fit in with my peers at school.

On my return to England at the age of 22, I lived in a multicultural city which had a large West Indian (Jamaica, Barbados, etc.) community where I assimilated well. Of course, in school before I moved to Nigeria, I had experienced some racial name calling such as “Blackie” but it never really bothered me that much as I usually responded with some name calling of my own and as such, I was able to go through my initial schooling relatively unscathed.

Unquestionably, racism does exist in England and I did experience it firsthand. My applications for various jobs were sometimes rejected unfairly, and I was even told blatantly to my face that a particular career choice was not available to me as a consequence of being a Black woman. These were all very demoralising experiences to be sure, but as I knew that this wasn't particularly about me per se and was more about people’s attitude to people of colour as a whole, I licked my wounds and went about the business of living. It was when I came to live in Japan that I began to rethink who I was as a Black woman.

Given that Japan consists of a predominately homogeneous population, foreigners, especially non-Asians, stand out. As a Black woman in Japan, and at the time of this writing, as one out of only a handful of Black people living in Kyoto, I have experienced the anxieties of trying to fit in when one is different. At times this struggle made me feel very isolated. ‘Standing out’ is traditionally something that one tries very hard to avoid in Japanese society and is expressed in the popular Japanese saying, “The nail that sticks up gets hammered down” (*deru kui wa utareru*). Thus standing out from this context carries with it negative connotations of being strange, weird and a host of other things. Of course, not fitting in (literally and otherwise) has always been a fact of life for displaced Black women. And here in Japan, as hard as I tried to not stand out, I consistently failed in my endeavors.

Being a Black woman living in a culture like Japan, that is so different from cultures that I had been familiar with, was at times quite stifling and even oppressive. When I first arrived in Japan while still in the ‘Honeymoon Stage” of loving everything and everyone here, although I noticed people staring at me, I was too enamored with just being here to be bothered by a few stares. But as time went by, and the novelty of being in Japan had worn off, the constant staring, finger pointing, bag clutching, and many other things made me feel very uncomfortable, as central to my existence here was the clear message that, indeed, *I stood out*.

In Japan, I have often thought of myself as being both ‘invisible’ and ‘marked’ simultaneously. Like the quotation at the beginning of this essay, in spite of the blackness of my skin, I constantly feel as if I have been “white-d-out”. Basically, I don’t exist. People see what they want to see and don’t see what they cannot easily understand. For many Japanese people it is inconceivable for a Black woman to take up a seat next to them on a train, or worse yet the thought of them taking the empty seat next to a Black person. In spite of the tired look on

everyone's faces at the end of a long day, the seat next to me on the train often remains empty. At the same time, that I am made invisible in Japan, I am also constantly 'marked' here in ways that never occurred in Africa and only rarely occurred even in England. In England, I am unmarked as another citizen of a multicultural society, a person of colour. In Japan, I am not only marked as *'gaijin'*, but as an *extreme* (that is, *Black*) *gaijin*.

How have I come to adapt to this *invisibility* and *markedness* that I carry around with me all over Japan, everywhere I go? In many ways, I feel like a walking 'social studies lesson' for Japanese people to learn. I want people to see that Black people are just like them in many ways. They don't need to clutch their bags thinking that all Black people are thieves. Black people have polite manners just as Japanese people do. We also have feelings, dreams and hopes, just like they do. We have friends and families. We laugh, cry and love.

Through my work as a university lecturer of English I feel that I have touched my students by merely being myself and teaching with integrity as any teacher would. Students have given me feedback saying that while at first they found me to be "scary", after coming to know me they learned that I was kind and sensitive. I am sure that I taught those students much more that just English.

Before concluding this essay, I want to leave my readers with a very important message. What I really want to express here is not so much what I have shown the Japanese people, but rather what the Japanese people have taught me about myself. This has been a life-changing experience for me that I will always treasure.

Throughout the years I have resided in Japan, I have come to realize that I am much more than what my passport indicates, as a 'British Citizen'. Japan has taught me that I am a Black woman with a rich African background which I am extremely proud of. While wanting to be unmarked and visible, Japan has lead me back to my roots, not England, but Africa. This nurturing journey that I have gone through has increased my love for Japan. Japan has been like a mother to me: strict and realistic at times, but also warm, nurturing and always there for me. I will always appreciate Japan for this.

As I continue my life's journey I am not sure where I will be lead. However, this exotic Asian culture of Japan, so different from my own, that began to attract me as a young adult in England who happened upon a TV program about Sumo, will forever travel with me. I cannot imagine ever totally leaving Japan, although I may do so in a physical sense as Japan is such a part of me. "Thank you, Japan. I love you."

表彰を受けるアバスさん

“Japan: What Lies Beneath?”

1980 年生まれ。高校教師としてアイルランドから来日約２年。日本人 と結婚したばかり。

JJ O’Donoghue

What is the image of Japan in the international community? Is it cliché or combinis, fact or fiction, Hello Kitty or Hondas? In trying to answer this question I first conducted a straw poll among my friends and family. I emailed them this question; “What you think about when you think about Japan? Answer in one word.”

First, what impressed me was the volume of answers and the speed at which people answered. Everybody was eager to answer. Of the cohort of about 30 or so respondents only three have visited Japan; the rest of the group have only ever experienced Japan from abroad. The range of answers is testament to what I call Japan’s “soft-power super-power status.”

The one-word answers ranged from delicious food to cleanliness, polite, etiquette-obsessed, sushi, vending machines, Nintendo, umami, technology, strict, the Japanese flag, the Shibuya pedestrian crossing, eccentric, robots, trains, temples, tradition, clocks, pink, Hello Kitty, good cars, pine trees and Mr Miyagi from the Karate Kid movies. In light of the events of 11 March in Tohoku others mentioned earthquakes and Fukushima.

Of course giving your impression of any country in one word, especially one with such a long history, such a rich culture and an international reach is always going to leave out far more than it includes. But nonetheless it serves as an interesting starting point.

Having lived in Japan for nearly two years I am going to add my own words to my friends ‘one word’ answers and try to construct a picture of what Japan looks like from inside and outside.

Before I came to Japan anyone of the answers that my friends thought-up could have been mine; well, except umami. Japan has taught me much about food. Indeed Japan’s appetite for food is matched by its love of talking about food; more often than not my conversations with Japanese people often revolve entirely around food.

I first encountered Japan growing up in Ireland in the 1980s during Japan’s economic boom. Japanese exports were common sights in my neighbourhood; there were Nissans and Toyotas and Panasonic made a memorable entrance in the form of a videocassette recorder. I can still remember that video machine in my neighbour’s house; it was gigantic in the way everything seems bigger when you are a child, it had row after row of buttons, it looked more like something from the future, something from space or something you would use to get to space.

In keeping with technology by far the biggest star of all, certainly the most coveted was Sony’s Walkman. Imagine that you could walk to school listening to your own mix tapes—in fact, if you kept your head down and the sound low you could listen to your Walkman in class. It might sound quaint now in the digital era with Smartphones and MP3s as standard, but in my youth the Walkman was a touch of genius.

So like my friends who answered cars, robots, trains and technology, this is the Japan I first encountered—a country both far away and far ahead of Ireland, a place where technology came from.

While it was Japan’s economic might I first encountered, this was followed more broadly by aspects of Japanese culture that have gained universal appeal. Young people today are as likely to encounter manga as they are Mitsubishi. The

contemporary “Japan boom” has sent sushi global; Studio Ghibli movies are released in theatres across the world, manga’s popularity has spread like a virus, everyone I know under 35 has a Murakami novel by their bedside, Harajuku is known as much for being a style as much as it is a place; Mario has joined Pac-Man as a global pop-icon; Uniqlo and Mujirushi are on high streets around the world and for a while you could not walk into a pub through out the world without being handed a microphone ahead of a drink and ordered to sing a karaoke song.

Japan is ubiquitous, Japan is cool, Japan is represented around the world in so many ways, and yet on first coming to Japan I never felt more disorientated. I was *that* tourist taking photos of chopsticks, slippers, vending machines, the replica food displays, face towels and of course toilets, much to the amusement of Japanese people. It is not surprising that the cumulative effect of all these sights and stimuli can be disorientating.

A classic example of this is a description from the introduction to a well-known guidebook on Japan. The author, clearly overwhelmed on arriving in Tokyo, sets out to describe his new perspective; it was, he says, like arriving to another planet. This is not the first, or I suspect the last time I’ll hear this opinion, as if tourists regularly visit other planets thus allowing for comparisons. But, I appreciate the basic sentiments, if not the hyperbole.

It is worth noting that more than a century ago there was a similar “Japan boom” in the West. Following Japan’s rapprochement with the international community in the 1860s Japanese artefacts were displayed across Europe to widespread acclaim. Van Gogh took inspiration from ukiyo-e prints for his series of plum tree paintings. For Oscar Wilde, Japan, witnessed through prints, fabrics, paintings and costumes represented a new “perspective”.

Expressing his attitude to Japan Wilde wrote; "I feel an irresistible desire to wander, and go to Japan, where I will pass my youth, sitting under an almond tree in white blossoms drinking amber tea out of a blue cup and looking at a landscape without perspective."

Wilde, unfortunately, never did make it to Japan; had he, I hope someone would have advised him to bring sun cream for his porcelain skin and mosquito repellent for his long hours of wandering and pondering.

Back then Japan much like today had a powerful pull on the public imagination; it was exotic, inspirational and intricate.

In the age of the internet and the image we are familiar with two Japans; futuristic and ancient, crowded and lonely, cutting-edge and conventional, simple and confounding. The two-Japan perspective, at odds with itself, an elegant contradiction is the one which visitors encounter and one which has gained most traction around the world. Indeed, drawing on the sample of my friends’ responses a similar picture emerges.

But what if these are not contradictory or paradoxical at all; what if they are just numbers in the same equation. What if they are complementary?

Take the car for example; we are all familiar with the might of the Japanese automobile industry and how they have led production and development of new technology to meet the challenges of the twenty-first century, but among all these cars Japan is bicycle-mad. Every day I see wave after wave of cyclists on all manner of bikes; it even brightens up my morning seeing mothers ferrying kids, one on the back, one in the front, cycling to school. Yes, Japan loves cars, but it has not forgotten how practical the bicycle is.

No other country that I have been to has done so much to make the toilet a luxury destination; at first Toto’s toilets used to baffle me; all those buttons to clean parts of my body that I didn’t even know existed. But alongside these amazing toilets, or rather in the ground, are the bog standard Japanese toilets. These are easy to clean and easy to install. High technology exists side-by-side with practical utilities. Just as apartments and houses still retain a Japanese-style living room next to rooms to western-style rooms. At summer festivals men and women wear yukatas as well as sporting luxury designer bags. The list goes, high-school students learning to design robots as well as learning the rituals of tea ceremony or calligraphy. Living in

Japan, I have learned that opposites can complement each other; it is even possible for them to exist in harmony. I hope it is anyway, as I am getting married this year to a Japanese woman.

On a broader societal level Japan has adapted to having two dominant religions; aspects of both are used for different ceremonies and rituals. This, especially coming from Ireland, is quite incredible; religions don't have to be defined against each other; rather they can co-exist in harmony.

But I am not suggesting that Japan is always zen, the utopia that Wilde imagined, people wandering from blossom tree to blossom tree drinking tea. Like anywhere else there are the anxieties and hassles of modern life, family, work, commuting—but at least the trains are nearly always on time and people do that nice thing that seems to have gone out of fashion nearly everywhere else in the world, queuing.

On 11 March we all witnessed the discord between nature and humanity when the earthquake and tsunami struck Tohoku.

In light of the tragedy and destruction in Tohoku and the fear generated from Fukushima, people around the world connected with Japan; this time it was a connection bigger than trade or even culture, it was a connection borne out of humanity, of a concern for others in the face of disaster, tragedy and anxiety. There has been in the months since a global outpouring of goodwill for Japan.

In such a time of extreme crisis it is a testament to the Japanese spirit and discipline that the social contract, a concern for others, for the group, for civility and for society was upheld with grace. There were no scenes of looting; instead the images were of people queuing of co-operation. Japan has been severely tested and challenged in the past; the strength of its people to overcome each crisis is truly admirable.

The Tohoku earthquake and tsunami also showed how Japan has changed; teams from all over the world came to provide disaster and humanitarian relief. At one stage up to 20,000 US armed forces were in Tohoku assisting in Operation Tomodachi. To say that the months, years ahead will be difficult is to understate the magnitude of the emotional and physical impact of the quake and tsunami.

Japan is a nation that keeps re-inventing itself, in appliances and gadgets, in manga, games and novels, in architecture and art. There is a depth to Japan which is humbling. In the days following the earthquake a Japanese colleague asked what was the reaction in Ireland to the events in the Tohoku. I remember telling her how people were concerned and compassionate, but also they were impressed, as was I to see how the Japanese people were so quickly pulling together. I told my colleague that I do not know how people in Ireland would act if something so devastating were to befall us. Really I don't know, but then afterwards I thought—we could take examples from Japan.

To return to my friends and family and their one word answers, I hope that as many of them as possible can come to Japan, if only to add more words to their impressions of Japan.

One of the things I love about Japan is how it makes the ordinary elegant. For instance in one of my favorite restaurants the staff always overfill your cup of sake so that it spills into the saucer beneath. Not only do you get more sake, (always good) but also the hospitality of the restaurant is subtly expressed. Or the kusari-doi, a simple elegant down pipe or rain chain. The simple function of draining rainwater off a roof is transformed into an understated yet magical performance.

I know that many of my friends want to come to Japan, and there are so many places that I would like to show them, the view of Kyoto from Daimonji, the mists gathering like smoke clouds on the Shimanto river, the countless wonderful restaurants and izakayas. And most of all I want them to meet the people behind their one word impressions; the people that make Japan Japan.

懇親会で参加者と歓談するドナヒューさん

Fukushima Crisis and Dented Japan in the International Community : My View

1973 年生まれ。バングラデシュから新潟国際大学に留学して 1 年、国際関係論を学ぶ。現職は外交官。

Md. Shafiqur Rahman

Japan enjoys an enviable reputation and respect in the international community in many ways. A responsible and committed member of the world community, Japan has earned a remarkable stake in global affairs through its soft power of diplomacy. After its resurrection from the debris of the World War II, the country renounced the path of war and has established its identity as a peace-loving nation exerting leadership in global peace and security. Economically the country achieved enormous strides in commerce and trade during the 1960's and 1970's and emerged as the second biggest economic giant in the world. With its distinct culture, unique language, work-ethics, Japan climbed the ladder of development presenting itself as a role model for development in Asia and inspired some countries to pursue 'Look East Policy', a growth model recapitulated after Japan. Again, with its aid package through ODA policy and contributing participation as a development partner, the country exerts enormous good will and influence across the globe. In terms of cultural diplomacy, Japan is perceived as a contributing member in world peace and a global leader in the arena of science and technological development. Lately, the economic power has suffered decline and the recent Fukushima crisis added a new dimension denting the global image of the country. This essay is intended to draw upon as assessment on how Japan's image in the world polity suffered a setback in the face of Fukushima crisis based on my personal observation and experiences during the one year stay in Japan.

Japan has undoubtedly showed pioneering leadership in scientific development and technological innovation and people globally held confidence in Japanese capability in the promotion of scientific research and technology. To this is added Japan's identity as a development partner of the developing world. The country's diplomacy has successfully projected the technology-driven society and developed economy and earned the recognition of global leader in world affairs. Much of the reputation has dented in the handling of the Fukushima Daiichi crisis resulting from the biggest earthquake accompanying the tsunami. It has been alleged that Japan has been unable to live up the expectation level with regard to the handling of the nuclear crisis and the control of radiation from the reactors. The allegation also includes the level of efficiency and transparency in dealing with the crisis. Adequacy in safety measures and access to information to the world have also been called in question. Global civil society has, however, eyed the management of the crisis from the humanitarian perspective. This results in a damage or dent to Japan's global image in leadership calling in question the capability and efficiency of Japan in the management of disaster.

An objective evaluation of handling the nuclear crisis and its impact on the international community deserves a closer discussion. The Fukushima nuclear plant maintained by TEPCO to generate electricity in Tokyo and its vicinity was badly shaken by the tsunami triggered by the 9.0 Richter earthquakes, an incident unprecedented in Japan's history leading to several nuclear reactors disarray and leakage of radiation across the area and beyond. Nobody questioned the incidence itself, but the developments that followed the handling of the crisis, did raise some queries among nuclear experts and humanitarian activists around the globe. The global community was concerned about a possible nuclear disaster engulfing Japan and beyond as painted by electronic media. No doubt,

the international community wanted to see a transparency over the dealing of the issue. The government of Japan, governed by a sense of pride and self-esteem over technological sophistication, allegedly showed initially a cold shoulder towards proposals of cooperation and assistance from the West. This gave a wrong signal to the international community questioning Japan's egotism and self-esteem.

Handling the crisis showed a remarkable difference in approach. Experts from the USA and Europe differed in the way Japan was dealing with the crisis. Japan's alleged unwelcoming attitude towards proposals of cooperation and assistance from the friendly states immediately after the crisis helped take shape such perception. Some nuclear experts even complained that Japan was hiding information from reaching public regarding the degree and dimension of the crisis. To this is added the view from the human rights perspective that adequate safety measures were not taken with regard to the security of the workers in the power plant. The rift was also obvious in declaring the safety zone for the radiation area between Japan and its western allies including the USA, France, and Germany etc. Openly Korea criticized Japan's handling of the issue as incompetent. Given the depth and dimensions of the perception pertaining to the issue, Japan was misperceived as an egoistic and proud nation.

While there is a fusion between fact and phantasy in the claim, one needs to unearth the myth in order to have a sound grasp of the issue. Given the transparent image of the country, the question now arises: Is Japan bad at communications? or why were they not loud and clear in its deliberations to the public? One possible reason underlines the cultural perspective: By nature, Japanese are soft and indirect in communications i.e. their complex deliberations partly give reasons to their ineffective communications. The critics of Japanese society and culture point to the traditional allegation that the Japanese culture remains inapprehensible to foreigners. The other explanation pertained to the language barrier. The Japanese society is inaccessible to a non-native expatriate in Japan to the extent that one can hardly have easy movement in the countryside without the knowledge in Japanese language. This language barrier was partly responsible for failure to bring in the intended outcome, i.e. the expatriates could hardly grasp explanation or developments taking shape in the aftermath of the Fukushima disaster. As a result, the foreigners had to rely on the international media rather than the first-hand information from the host government. As an expatriate, despite being well-conversant in English, I was acutely faced with this complication owing to local language barrier during the critical days of the disaster and felt helpless regarding accurate information and easy movement inside Japan.

Regarding the initial Japanese aversion to global cooperation to mitigate the nuclear disaster, I feel tempted to endorse the views of the diplomats in Japan. The diplomatic circle in Tokyo believes that the govt. of Japan was late and dillydallying to respond to the call for assistance from the USA and Europe to handle/tackle the reactor leakage leading to the worsening of the situations in Fukushima power plants. Whether the criticism is incorrect or whether it carries a significant substance of facts, the perception or view affects denting Japan's image to a great extent. Not only a number of embassies including France, Germany and USA shifted their locations from Tokyo to elsewhere in Osaka or Hiroshima, the decision itself helped mould the public perception negatively with regard to the level of the safety and security in Tokyo arising out of the radiation contamination and the stance of the Japanese government taken to this end. Though embassies are sovereign entities with the mandate of deciding their own regarding security and safety of its institution as well as nationals and the host government is not in position to press decisions on them, the decision reflected the rift in view points with regard to safety and security held by the host government and the foreign governments represented in Japan. This action by the diplomatic community left loud message to the world.

There was other side of the story. As against the picture mentioned above, there was a quite different picture prevailing. It was seen that the expatriate community living in Japan decided to completely go by the decision of the host government. These

people kept unflinching confidence in the government initiatives taken to tackle the crisis and appreciated the courage, patience and fortitude with which the Japanese people faced the crisis. As a diplomat by profession currently pursuing a post-graduation in Japan, I experienced such an incident. I was surprised by the level of confidence and emotional attachment to the Japanese management by the expatriate Bangladeshis as they were pressing home the idea to the Bangladeshi authority not to move the embassy to the other part of Japan and to play bigger role and extend cooperation to the Japanese authority. Again, the element of surprise I was confronted with in the handling nuclear disaster is the stoicism with which the Japanese people faced. In this regard, the speech by the Emperor and the Prime Minister had overpowering impact upon the mass people who went by the measures taken by the government and helped in overcoming the crisis. The world could see, with awe and wonder, the national unity and ethos of Japanese nation that they can walk tall amid disasters with their spirit unshaken.

A discussion on handling the Fukushima crisis would remain incomplete without discussing the role of the electronic media. The global media like CNN and BBC had access to and they were broadcasting live programs from Fukushima. It was observed that the media reports, markedly different from local deliberations, were speculative and biased on radiation and possible meltdown of the nuclear reactors which some labeled as hostile and interest-seeking. However, the way CNN or BBC was broadcasting news, created much confusion and misunderstanding among foreigners, to some' s view, with malice and propaganda. The fallout effect of news broadcast regarding the immediacy of the meltdown of the reactor and the spread of the radiation generated by the media was enormous. Careful observers might have noticed that some western electronic media were engaged in negatively projecting Japan, partly in continuation of the ''Japan bashing" in the USA and Europe which took their roots in the delayed recall of Toyota cars from around the world markets.

When problems are identified, it is possible to seek for remedies. Then what efforts could Japan take to paint the dent in its image triggered by Fukushima disaster? Japan should continue to keep up its good efforts as a committed partner of development of the developing world and responsible contributing member of the international society. This will help sustain and maintain Japan's global leadership in world affairs. It is to be noted that the world polity has confidence in Japan's capability and stake in global affairs and Japan should grid up its loan to shoulder this responsibility as the country has the means and resources to provide capable leadership. As attainment of global leadership requires promotion of a global language, to cope with the change and pace of globalization, Japan should revisit its language policy and put accent on promoting English as second language. This would not only help Japan to win over global market, but to attain harmony and togetherness with the pace of the global society. The country may also take steps to strengthen the media and communication sectors to remain at par with the Western media. In international politics, Japan's soft-power diplomacy as a means to increase its global visibility and presence will continue to bring in fruition. Japan could pursue the policy advocated by former Foreign Minister Takeo Fukuda, founder of Japan Foundation: Japan should now seek its own prosperity in the prosperity of the world, and the whole nation must be conscious of this goal. As long as Japan would continue to make more contribution to the development of the poorer nations and will open up culturally and intellectually to the international community, the country will win the hearts and minds of the global community. With regard to Fukushima crisis, I strongly believe Japan would be able to gradually overcome the crisis and rebuild its economy by virtue of its national unity and spirit as the economy is endowed with an inherent capacity and will to reassert itself from the bottom of crisis.

賞状を受け取るラーマンさん

当協会の運営を支えてくださっている団体・個人

■ 協会役員

理事長　児玉　實英

評議員　青谷　正妥　稲田　和子　稲盛　和夫
井上　利丸　大倉　治彦　加藤　剛
小林　哲夫　クラウス・シュペネマン
クレイグ・スミス　高木　路子
立石　義雄　直野　信之　畑　正高
久富千鶴子　廣瀬　和子　広中和歌子
二股　茂　ジョン・マカティア
水谷　幸正　南　惠美子　村田　純一
森　純一　森田　嘉一　山本　壯太

理　事　荒木不二洋　海田　能宏　柏原　康夫
北川善太郎　児玉　實英　小林　哲也
金剛　永謹　白石　厚子　玉村　文郎
畑　肇　冨士谷あつ子　森　金次郎

監　事　猪野　愈　長谷川　彰

■ 法人維持会員

(財) 池坊華道会　オムロン株式会社　京都外国語大学
(株) 京都銀行　京都信用金庫　京セラ株式会社
月桂冠株式会社　サントリーホールディングス株式会社
(株) 松栄堂　(株) 淡交社　(財) 不審菴
佛教大学　ガリオア・フルブライト京滋同窓会
村田機械株式会社　(株) ワコールホールディングス

■会員

浅野　敏彦　安部田幸子　新木　祐子　荒木千枝子
飯田　淳子　糸井　通浩　伊藤紀美江　井上　章子
入江　由美　上野　和美　永　礼子　遠藤　優子
生石　文代　大泉智賀子　小田　真子　小野田文子
海田　能宏　海田　礼子　加藤　久雄　加藤　寛子
河合瑠美子　河本　倫子　木﨑　晴美　木村富士子
北川麻季子　金　孝洙　倉住ヨハンナ　児島　計子
児玉　實英　小林　和美　小林　史織　小林　繁代
駒井　節夫　財間　敬子　坂牧　藍　坂本　眞司
相模真知子　櫻井喜久子　澤井　弘子　澤木　福男
柴山　尚之　志和　晃二　白石　厚子　千　弘倫
高木　路子　高田　啓　高橋　綾子　竹原　信子
田附　房子　館田　健一　玉村　文郎　田和紀美子
反保　良子　辻　加代子　鶴屋　吉信　土井　茂
内藤　純子　中原　千波　中村　皓一　中村　早苗
西田ふみ江　野口　絢子　河　英伊　拝師　照代
林　美木子　久富千鶴子　廣瀬　和子　藤　睦美
冨士谷あつ子　別所真知子　松村　知子　丸池　暢穂
水野あづさ　水野　幸子　水野　美子　山添　義江
吉田　慶子

■ 協力者

司法書士法人　絆

■ 特別プログラム後援

京都府 77 万円（国際交流講座、国際文化講座
エッセーコンテスト）
京都市 19.4 万円（国際交流講座）
京都ライオンズクラブ 20 万円（エッセーコンテスト）
(株)淡交社（エッセーコンテスト）
(株)スリーエーネットワーク（国際文化講座、
エッセーコンテスト）
京都にほんご Rings （国際文化講座）
(株)日本語の凡人社（国際文化講座）

■ スタッフ

荒木千枝子　伊藤紀美江　海田　礼子　児島　計子
白石　厚子　高木　路子　河　英伊　久富千鶴子
廣瀬　和子

編集後記

2011 年度の主要な事業である国際交流講座、国際文化講座、エッセーコンテスト、国際茶会はすべて終えることができましたので、ここに活動報告かたがたニューズレター38 号をお届けします。

国際交流講座は開講以来 29 年目となり、この間の多くの講座修了生がその学びを日本語教育や国際交流に日々生かしています。例えば、講座修了生によるボランティア日本語レッスンは 5 年目に入り、ますます学習者が増え、事務局は日本語学習や生活相談の場となり、活気にあふれています。

当協会の活動にご支援、ご協力いただきました皆様に深く感謝いたしますとともに、どうか今後とも引き続きよろしくお願い申し上げます。(MT)

財団法人京都国際文化協会
〒606-8546　京都市左京区粟田口鳥居町 2-1
京都市国際交流会館 3F

Tel: 075-751-8958　Fax: 075-751-9006
Mail: office@kicainc.jp
kicajim@mk1.macnet.or.jp
URL：http://kicainc.jp/

理事長　児玉　實英